〔研究論文〕

加曽利E期の世界観（II）

堀越正行

4. 加曽利E期における主体的な世界観

(1) 土偶

確実に原加曽利E期と加曽利EⅠ期に属する「土偶」は、今までのところ1例も報告されていない。従って加曽利E期の土偶は、そのⅡ・Ⅲ期において製作されているのである。その分布をみると、

✡加曽利EⅡ期

東京都町田市鶴川遺跡8号住居址（註1）　2
東京都町田市鶴川遺跡11号住居址（註1）　1
東京都町田市鶴川遺跡20号住居址（註1）　1
東京都町田市鶴川遺跡30号住居址（註1）　2
東京都八王子市向原遺跡1号住居址（註2）1
埼玉県所沢市膳棚遺跡42号住居址（註3）1
東京都国分寺市恋ケ窪遺跡住居址（註4）　1
東京都練馬区三菱レイヨン遺跡住居址（註5）1

✡加曽利EⅢ期

東京都八王子市向原遺跡3号住居址（註2）2

✡細別時期不詳

東京都町田市鶴川遺跡（註1）　2
千葉県松戸市紙敷中峠貝塚（註6）　1
埼玉県狭山市宮地遺跡（註7）　1

と、加曽利EⅡ期に多摩丘陵、武蔵野台地、多摩地方、加曽利EⅢ期に多摩地方でみられ、細別時期不詳の中峠例は例外的な分布を示している。

表採品と発掘地点不詳の土偶を除くと、12例が住居址の覆土から、1例が住居の床上から出土している。鶴川遺跡8号住居址は、『土偶がNo.1以外に2個も出土した特異な住居址でシャーマンの家であったかもしれない。特にNo.1の土偶は、全長5cmのかわいいものであるが、その上に故意か偶然か土器片で覆ってあった』（註8）。科学読売誌上の実測図から、8号住居内西側、壁から約1m離れた地点にあったことがわかる。ところがこのようなことが本報告（註1）には一言も記されておらず、住居址の実測図もない。更には土偶の数も本報告では2個、速報（註8）では3個と違うのである。これは本報告の不備というべきである。

いずれにしても勝坂期土偶と同様な傾向として、加曽利E期土偶の多くも住居址の覆土から出土している点に注目する必要がある。

また6遺跡15例中、鶴川・膳棚・中峠の計3例が完形で、12例は欠損している。このうち三菱レイヨン遺跡例は男性の性器が表現されているので男性土偶と考えることができる。

加曽利E期土偶の基本的形態は、末広十字形の扁平板状土偶である。頭部は何の加飾もない無文の丸坊主頭が普通であるが、鶴川遺跡第50図1は頭部が前面に突き出し、『顔には目と口を示す円形突刺しが施されている』（註1）という。手は横か斜め上に開いており無文である。手の指の表現等は全くない。胸には必らず一対の乳房がつけられ、また腹部には妊娠を象徴したと思われる隆起が多くの土偶にみられる。江坂輝弥氏はこのような隆起に対し、『胸には臍半球形に突きだした2つの乳房がつけられ、腹部の臍かと思われる位置にも同様な突出部がある。これは臍を示すものか、女性陰部を誇張して表現したものと思われる』（註9）と解釈しているが、他例からも臍などではなく、妊娠を象徴化したものと考えられる。足は通常省略しているが、鶴川遺跡20号住居址例は中でも足表現が明瞭であり、加曽利E期土偶としては例外的であるといえる。

多くの土偶には、左右乳房下に2～3本の沈線が脇からのびるように刻まれ、腹面と背面の境から臀部にかけても2～3本1組の沈線が走っている。また胸部～腹部の真中を垂直に走る沈線が1本表現されている土偶が多く、このような沈線を普通正中線とよんでいる。恋ケ窪例と中峠例は、この正中線を挟んで両側に多数の沈線を横位に走らせている。このように、加曽利E期の土偶は、単純な形態と簡単な沈線文からなり、大木系の土偶や曽利系の土偶に比較すれば、もっとも素朴な土偶といえよう。

群馬県桐生市菱町大門遺跡の昭和３６年８月の調査で、『加曽利E式土器を炉に埋めた住居址らしい遺構、目的不明（墓址？）の組石遺構と、それと関係あると思われる中期土偶』（註１０)が１つ出土している。日本考古学年報（註１１）の記録でも細別型式は不詳であるが、地方的な加曽利E式後半の土器に伴なうらしく、加曽利E期土偶の諸点と著しく違う存在ではない。

以上のことから、加曽利E期の土偶は

①三菱レイヨン遺跡例は男性土偶であるが、他はすべて女性土偶である。

②完形土偶は鶴川・膳棚・中峠それと大門遺跡の４例であり、他はすべて欠損土偶である。

③表採・出土地点不明の２例を除けば、鶴川８号住居址例のような床面上もしくは住居址の覆土から出土している。

④特殊な出土状態を示したのは鶴川８号住居床面出土例で、完形土偶の上に土器片が覆つてあった。住居廃絶時の安置かそれとも廃絶後の埋納か。

⑤土偶を製作もしくは使用した集落は極めて稀であり、一般には土偶は使用されていない。

⑥以上から加曽利E期の土偶は、妊娠を象徴化した土偶が多いことから安産の依り代と考える場合その数が少ないことから特殊な場合につくられることがあったと考えられる。いずれにしても加曽利E期土偶は一般性を欠き、かつ普遍性をもつ用途ではなかったと考えることができる。

⑵　埋甕

桐原健氏は、昭和４２年３月発行の『古代文化』誌上でそれまで発掘された長野県下の中期住居址１５０余軒を検討し、うち３６住居址に４３例（表によると３８例）の埋甕を認め集成した（註12)その数は１年後、４０住居址５０例以上（註13)に増加し、さらに緊急調査などの大規模な発掘によって昭和４６年春までに長野県内だけで５３遺跡１３８住居址１９１例（註14)に達したという。関東地方では敷石例を含めて１３１住居址以上１５３例以上が管見に及び、中部・関東・東北地方までの総計は２８４住居址以上３６６例以上に達し、今後もさらに激増することが予想される。

これら埋甕の時期は、そのほとんどが縄文時代中期後半であり、後期初頭、中期前半の例は少なく、それ以外は稀である。

関東地方における勝坂期の埋甕は、多摩丘陵と多摩地方に若干認められるだけであるが、加曽利E期になるとその分布を広げ数をます。

☆加曽利ＥⅠ期

神奈川県横浜市磯子区左藤内遺跡（註１５）
神奈川県横浜市鶴見区梶山遺跡（註１６）
神奈川県横浜市旭区宮沢遺跡（註１７）
神奈川県横浜市港北区朝光寺原遺跡（註１８）
神奈川県川崎市初山遺跡（註１９）
神奈川県川崎市野川西耕地遺跡（註２０）
東京都町田市鶴川遺跡（註１）
東京都八王子市中原遺跡（註２１）
東京都八王子市狭間遺跡（註２２）
東京都八王子市宮田遺跡（註２３）
東京都小金井市中山谷遺跡（註２４）
東京都世田谷区大蔵遺跡（註２５）
埼玉県所沢市膳棚遺跡（註３）
埼玉県入間市坂東山遺跡（註２６）
埼玉県北足立郡桶川町高井遺跡（註２７）
埼玉県岩槻市西原遺跡（註２８）
千葉県市川市姥山貝塚（註２９）

☆加曽利ＥⅡ期

神奈川県座間市蟹ヶ沢遺跡（註３０）
神奈川県横浜市戸塚区そとごう遺跡（註３1）
神奈川県横浜市磯子区三殿台遺跡（註３２）
神奈川県横浜市鶴見区梶山遺跡（註１６）
神奈川県横浜市旭区宮沢遺跡（註３３）
神奈川県横浜市港北区朝光寺原遺跡（註１８）
神奈川県横浜市港北区農専地区遺跡（註３４）
神奈川県川崎市初山遺跡（註１９）
神奈川県川崎市潮見台遺跡（註３５）
神奈川県川崎市東神庭遺跡（註３６）
東京都町田市鶴川遺跡（註１）
東京都町田市清水台遺跡（註３７）
東京都八王子市中田遺跡（註３８）
東京都八王子市宇津木向原遺跡（註３９）
東京都世田谷区野毛町公園遺跡（註４０）
東京都杉並区谷戸第２遺跡（註４１）
東京都調布市深大寺東原遺跡（註４２）
東京都東久留米市小山台遺跡（註４３）
東京都西多摩郡瑞穂町狭山A遺跡（註４４）
埼玉県所沢市膳棚遺跡（註３）
埼玉県狭山市宮地遺跡（註７）
埼玉県東松山市岩の上遺跡（註４５）

埼玉県入間市坂東山遺跡（註２６）
千葉県船橋市塚田貝塚（註４６）
千葉県木更津市祇園貝塚（註４７）
☆加曽利ＥⅢ期
神奈川県川崎市初山遺跡（註１９）
東京都武蔵野市御殿山遺跡（註４８）
東京都練馬区上石神井扇山遺跡（註４９）
埼玉県入間市坂東山遺跡（註２６）
埼玉県狭山市宮地遺跡（註７）
埼玉県東松山市前山遺跡（註５０）
埼玉県岩槻市西原遺跡（註２８）
千葉県松戸市栗ヶ沢貝塚（註５１）
群馬県勢多郡北橘村小室遺跡（註５２）
☆細分型式不詳
神奈川県横浜市磯子区猿田遺跡（註５３）
東京都町田市金森遺跡（註５４）
東京都小金井市貫井遺跡（註５５）
埼玉県新座市嵯峨山遺跡（註５６）
埼玉県入間郡越生町上台山遺跡（註５７）
埼玉県北足立郡伊奈町志久遺跡（註５８）

以上のように、関東地方中期後半の埋甕の分布は、多摩丘陵、武蔵野台地を中心とし、相模原台地、多摩地方、比企丘陵、大宮台地、下総台地、房総半島、赤城山麓といった周辺諸地域にも若干認められている。加曽利ＥⅢ期における埋甕の減少は、多摩丘陵、武蔵野台地における埋甕の減少を反映しており、分布は散在傾向にある。この傾向は後期に至っても認められる。

☆堀之内Ⅰ（称名寺）期
群馬県利根郡水上町乾田遺跡（註５９）
埼玉県深谷市小台遺跡（註６０）
東京都武蔵野市御殿山遺跡（註６１）
千葉県松戸市陣ヶ前貝塚（註６２）
千葉県松戸市貝の花貝塚（註６３）
千葉県印旛郡四街道町千代田遺跡（註６４）
東京都利島大石山遺跡（註６５）
☆加曽利ＢⅠ（堀之内Ⅱ）期
東京都八王子市船田向遺跡（註６６）
☆時期不詳
東京都秋川市羽ヶ田遺跡（註６７）
群馬県利根郡水上町大穴遺跡（註５２による）

それまでの盛行地における埋甕の衰退と周辺への拡散、埋甕そのものの衰退と消滅が認められる。

埋甕と敷石が組合さる例は、加曽利ＥⅢ期では初山、御殿山、扇山（以上一部敷石）、宮地、坂東山、小室の６遺跡８例、後期では乾田、大石山、船田向の３遺跡３例、それにどちらかいずれかに属する羽ヶ田（加曽利ＥⅢか堀之内Ⅰ期）、大穴の２遺跡２例、計１１遺跡１３例が知られている。関東地方における敷石遺構の確実な総数は不明であるが、およそ100基ぐらい知られている。そうすると敷石遺構の１割程度が埋甕を併設しているにすぎず、未確認や新例を考慮したとしても、敷石遺構における埋甕の出現率は極めて低いものであろうことは注目に価する。敷石遺構の出現と埋甕の減少、敷石遺構の消滅と埋甕の消滅の因果関係の有無を明らかにする必要があるだろう。

埋甕の採用のされ方には大きく３つのタイプがある。同一時期のほぼ全住居にある集落（川崎市潮見台遺跡など）、同一時期の半数以上の住居にある集落（町田市鶴川遺跡・東松山市岩の上遺跡・川崎市初山遺跡など。いずれも加曽利ＥⅡ期）、同時に存在したと思われる住居の１～３軒に認められる集落（上記以外の埋甕をもつ集落）で、これに対して埋甕が採用されない集落（新座市新座遺跡、市川市今島田貝塚、市川市向台貝塚、船橋市高根木戸貝塚など）もある。埋甕の機能問題を含めて各集落における埋甕の有無、出現率の大小、設置のしかたや、いかなる集落構造、とりわけ居住のしかたや祭式にまつわる問題と関係するかが今後の大きな問題となるだろう。

(3) 甕棺

甕棺の上限は、縄文時代中期前半の勝坂期であろう。人骨が検出されたわけではないが、その状態からして甕棺と考えられるのが山梨県塩山市柳田遺跡（註６８）にある。柳田遺跡は墓地であり、住居を設営している重郎原遺跡（註69）に付属するものであろう。また長野県諏訪郡富士見町藤内遺跡（註７０）の特殊遺構の一部に甕棺と考えられるものがある。

中部山岳地方において甕棺が一定の方式をもって盛行するのは、埋甕と同じ中期後半の曽利期であり、この影響をうけて関東地方でも甕棺が加曽利Ｅ期につくられ、後期初頭の堀之内Ⅰ期まで続くようになる。加曽利ＥⅠ期の甕棺は西関東に限られ、埼玉県大里郡川本村舟山遺跡（註７１）、東京都秋川市中菅生遺跡（註72）、神奈川県中

郡伊勢原町横手原遺跡（註73）など〔東京都町田市清水台遺跡（註37）例は、胴下半部を欠損させた加曽利EⅠ式土器を正位に埋めたものであり、大形土器を逆位に埋置し、時に底部穿孔や欠損をみる甕棺との差が大きく、住居内の埋甕に近い〕でみられ、うち中菅生と横手原遺跡例が曽利Ⅰ式土器を使用している。

東関東の下総台地では、加曽利EⅡ期になって認められる。発表されている例では、千葉県市川市向台貝塚（註75）、松戸市寒風貝塚（註75）の2例がある。うち向台貝塚例には人骨が発見されなかったが、寒風貝塚例は、『底部を復原した高さ2尺口径1尺6寸5分厚さ腹部にて4分5糎の大甕であって口部を下に土中に差入れてあり、地表下約2尺にして底部に達した。中には耕土に混じたる骨片を収めてあったが腐損甚だしく僅かに頭骨破片と大髄骨の一部を残すのみであった』という。この報告には被葬者の年齢に関する記述が欠如しているにもかかわらず、吉田義昭氏（註76）は成人骨埋葬例と勝手に判断して引用し、勝坂式土器と誤認したため江坂輝弥氏の成人骨再葬甕棺墓例の上限例に歪曲されてしまった。寒風貝塚例の人骨は、後に小児骨（註73）と発表された。

関東地方の貝塚地帯では、後期初頭の堀之内Ⅰ期に甕棺が多く認められる。そのうち人骨が検出され、年齢が推定されている例を集めてみると、胎児2例、乳児3例、幼児4例、小児（乳・幼児を含めたよび方）6例、小児あるいは胎児1例で、胎児・乳児・幼児に限定されている。このことは加曽利EⅡ期の寒風貝塚例と矛盾しない。また他地域、他時期の甕棺被葬者層と相反しない。

関東地方でただ1例報告された成人骨例は、埼玉県入間市坂東山遺跡（註26）で発掘された称名寺範型の堀之内Ⅰ式土器を逆位に埋置した中から発見された熟年男性骨である。同時期の類例は青森県南津軽郡浪岡町天狗垣遺跡や同県上北郡六ヵ所村表館遺跡（註77）にある。江坂輝弥氏は、後期初頭の青森地方で成人の『遺骨の改葬を行なう葬法が、ひろくこの地方に行なわれていた』（註78）ことを予想しているが、これをそのまま関東地方に適用することはできない。むしろ一般には偶発的な発見によってたまたま成人骨を土器に収納した結果を物語るものであろう。

曽利式土器を用いた本源地域の甕棺は、底部を穿孔・欠損し、逆位に埋置するのが一般的であるのに対し、関東地方にくると時間の経過とともに逆位例が少なくなり、また底部穿孔・欠損例も少なくなって行く。縄文時代後・晩期の甕棺にみる、正位または横位、時に斜位に埋置し、底部も意識的に穿孔・欠損しない方式は、数量的には後期初頭に成立する。このような移行は、少なくとも本来の逆位、底部穿孔・欠損の意義が次第に失われ、形骸化していったという埋葬観念の変質を意味しよう。

しかし、甕棺は、愛知県とりわけ渥美半島から豊川流域にかけての晩期遺跡でみられるような群在は示さず、通常1個、多くて数個と極めて数が少ない。このことは甕棺が通常態としての葬法ではなく、特殊な葬法であったことを意味しよう。その証拠に神奈川県横浜市称名寺D貝塚（註79）では、堀之内か加曽利B期といわれる砂層から、胎児1体、幼児2体、若年1体、成人1体、壮年1体、熟年4体、熟年の終りか老年1体の人骨とともに、後期前半の土器内に『可成り月齢の進んだ胎児骨』を残す甕棺1個が発掘されている。また千葉県市川市姥山貝塚（註80）でも、約30㎝離れて逆位に並置された乳児骨を収納する堀之内Ⅰ式土器の甕棺2個の中間及びその周囲に、同じく乳児骨が散乱していたという。甕棺は、中・後期ではまだ特殊な葬法であったといえる。

(4) 埋葬と墓地

従って考古学的に確認される一般的な葬法は、土葬であるといえる。埋葬に際して土壙を掘り、遺体を納めて土をかぶせるわけである。現在人骨が検出されるのは、貝塚遺跡等恵まれた条件下においてであって、大多数の貝塚をもたない遺跡では、単に土壙が確認されるにすぎない。また甕棺葬や抱甕葬であれば、それなりの状態を仮想しうる土器が土壙中から出てくるはずである。

加曽利E期の埋葬人骨の姿勢は、そのほとんどが仰臥屈葬である。下総台地における加曽利E期の伸展葬は、管見に及ぶ限りでは次の如くである。

松戸市貝の花貝塚（註63）	1体
松戸市子和清水貝塚（註81）	2体
市川市今島田貝塚（註74）	1体
市川市姥山貝塚（註74）	1体
船橋市高根木戸貝塚（註82）	1体

千葉市蕨立貝塚（註８３）　　３体

他に未確認、未発表例はあると思うが、屈葬に比べて極めて少数例にとどまる点は、変更を要しないであろう。

先行する阿玉台期の葬法は、全くわかっていない。おそらく阿玉台期と加曽利Ｅ期の葬法は異なるのであろう。加曽利Ｅ期の葬法として目立つのは、住居廃絶後に堆積した土砂がまだ完全に埋めつくしていない窪地に、意識的に遺体を埋葬する廃屋墓である。廃屋に埋葬したのであるから、大正１５年に東京帝国大学理学部人類学教室が調査した市川市姥山貝塚（註29）Ｂ地点Ⅸ号竪穴住居床面上に折り重なって発見された５体の人骨は、埋葬の痕跡を認めず、また死んだ時はまだ廃屋であるとは認め難いので放置墓とよぶべきであり、廃屋墓とは区別すべきである。『廃屋を利用して墓地としたもの』（註８４）が廃屋墓なのであるから、坂詰秀一氏（註８５）の示した次の３分類

Ⅰ竪穴住居址の床面上に死者を放置したもの

Ⅱ竪穴住居址の床面下に甕に入れて埋葬したもの

Ⅲ洞窟住居址に埋葬したもの

は、廃屋墓にはならない。Ⅰは放置墓、Ⅱは屋内葬で生活中の行為である。

貝塚地帯における加曽利Ｅ式土器使用者が、１つの著しい葬法として廃屋墓の形式を好んでとり葬位は仰臥屈葬を採用していたのに対し、内陸地帯における同式土器使用者たちの葬法は、おそらく別の形式をとっていたものと思われる。

その好例として埼玉県所沢市膳棚遺跡（註３）があげられる。北側の台地平担部は、阿玉台・勝坂期から加曽利ＥⅢ期までの住居が継続的に営まれ、住居群の南方台地傾斜面には、同時期の墓壙が広がっていると解釈されている。つまり、住居群と墓址群が近接してはいるが明確に分離しているのである。

また埼玉県新座市内畑遺跡（註８６）からは、加曽利ＥⅡ・Ⅲ式及び称名寺範型土器を出土するという６基の土壙が発掘されているが、内畑遺跡ではこの時期の住居址は発掘されていない。『このことは住居址群に付随した遺構ではなく、生活の場から離れた墓址的遺構と考えられるものである。墓域が縄文時代中期後半からしだいに住居構成地域から離れ、墓域として別個に形成されるようになることを示しており、内畑遺跡の場合は後期初頭の称名寺期まで継続して使われていたということになる。このような傾向は後期に入り一層強く墓域と集落址が隔絶するようになる』という。

このような集落と隔絶した墓址遺跡と考えられる遺跡としては、埼玉県浦和市三室馬場遺跡（註８７）：阿玉台・勝坂式～安行ⅢＣ式土器、椚谷遺跡（註８８）：堀之内Ⅰ式土器、明花遺跡（註８９）：堀之内Ⅰ式～加曽利ＢⅠ式土器などを出土する遺跡が知られている。しかし一方で、内陸部集落においても住居群と墓址群が明確に分離せず、混在しているものもある。がその場合、墓址と考えられる土壙の数は極めて少ない。総じて『土壙が、中期後半から住居占地から分離の傾向をみせるようになり、少くとも、内陸部では、後期中葉頃、明確な形で分離する』（註９０）ことが認識される。

東京湾沿岸の下総台地に住む加曽利Ｅ式土器使用者たちには１つの思惟がある。それは貝塚に対する思惟である。大正１４年、清野謙次氏は『貝塚は石器時代の廃棄場である』と定義し、『日本石器時代人民は墓地を厚貝塚の附近に定める習慣があって、地形上墓地と貝塚とは或る関係がある事が、此頃になって漸く分って来た。（中略）貝塚に近接して一定地形の所に墓地があり、此墓地の地域が拡大し、貝塚地域も漸次拡大せられて、遂に貝塚が墓地を覆覆ふ様になったという仮説』（註９１）をたてた。この仮説はその後も繰り返し述べられている（註９２）。確かにそういう場合もあろうが、すべてこのような偶然説に律することはできない。

この清野氏の貝塚と埋葬（墓地）の二元的性格の仮説を批判し、両者間に何らかの思想的一致が存在したという一元説を西村正衛氏は唱えている。あらゆる自然遺物（貝殻をはじめとする動植物の食料残滓）、人工遺物、その他住居址までも埋葬と関係をもったものと考え、『貝塚はすべて生命をうしなったもの――現世の生活から離れたものの存在する場所としてみなされていた』（註９３）という。この西村正衛氏の考えを受け、更に発展させて『縄文時代はアニミズムの世界であった』（註９４）と戸田哲也氏は主張している。

問題は、縄文時代を通して一元説なりアニミズム説なりが認められるのかという点にある。戸田哲也氏の場合、特にその論文のⅡにおいて、現象を自覚的・目的的なものとしてのみ考え、無自覚

的・無目的的な場合を全く予想していない。場合によっては、穴ほどの窪地や斜面にごみを捨てることは、人間のもつ癖として理解すべきかもしれないのである。長い縄文時代の諸事象をすべて一律に捉えることは、多くの危険を伴なうのである。

例えば、関東地方では、中期後半加曽利E期に数多くの廃屋墓の存在を認めることができる。しかし、形態上同じ廃屋墓ではあっても、千葉市向ノ台貝塚（註95）の早期末茅山期の例、市川市北台（旧東練兵場）貝塚（註96）の前期後葉諸磯b期の例に、1つの埋葬法として固定化した加曽利E期の廃屋墓と同一の意義・解釈を与えることは、その例が極めて散発的で、むしろ例外的な存在であることから、おそらくできないであろう。

加曽利E期に限定した場合、西村正衛氏の一元説は当を得た解釈ということができる。

加曽利E期になると、にわかに人骨の発掘例が増加する。その大部分が廃屋墓として分類されるものであることは、既に繰り返しているところである。これは廃屋への埋葬が、廃屋への貝殻の遺棄と同時に行なわれていたという彼らの習俗に結果するものである。なぜごみ捨て場から人骨がでてくるのかという疑問は、まさしく今日的発想法による不可解性から発しているものである。この場合、先の清野謙次氏の理解のしかたによっては解釈することができない。

この廃屋への遺体埋葬、貝殻の遺棄、鳥獣魚骨の遺棄、土器や石器などの廃棄は、決して単なるごみ捨て場の如き思惟に由来せず、「生なきもの」の永遠の終息地という世界観に由来するものと考えられる。つまり加曽利E期に特徴的な廃屋パターンは、あらゆる「生を失ったもの」の終息地、送り場という、抽象的思惟に発する象徴的行為の顕在的な所産であるということになる。下総台地を中心とする東京湾沿岸の加曽利E期の貝塚遺跡においては、自然遺物・人工遺物・人骨・廃屋というあらゆる生命を失ったものは、思想的一致をみるのである。これを加曽利型の世界観とよぶことにする。

これに対して内陸部では、土壙が住居地域の中にみられる場合（埼玉県大里郡川本村舟山遺跡、埼玉県所沢市水窪遺跡例）と、土壙が住居地域と分離している場合（埼玉県所沢市膳棚遺跡例）の2者がある（註90）。前者の住居地域の中に土壙が介在している場合でも、加曽利型にみるようなあらゆる「生なきもの」が渾然一体となった状況は考えられない。後者の場合、死者を分離しているのでより一層明白である。内陸部諸集落の埋葬法の全般的傾向は、未だ的確に把握し難いが、少なくとも加曽利型への接近を示さず、むしろ時間を経るにつれて住居群（居住域）と墓址群（墓域）の分離が進展していくものと考えられる。居住域と分離した所に墓域が限定され、この墓地に人間の死体以外の生命を失ったものの積極的廃棄・遺棄が認められず、墓地への死体埋葬と人工遺物・自然遺物・廃屋という生命を失ったものの両者に思想的一致をみないものを、加曽利型に対して膳棚型とよぶことにする。

(5) 中期の他界観

大塚和義氏は、東京都大田区千鳥久保貝塚（勝坂式という）、宮城県桃生群川下り響貝塚（大木10式頃）、宮城県登米郡青島貝塚（大木10式頃）の鳥嘴形角器をとりあげ、『これら3例とも、モチーフ・材質・時期ともほぼ一致することは、すくなくとも、関東から東北にかけての地域に、鳥を表象とする観念が普遍的に拡がつていたと考えられる。これがいかなる観念であったのか。想像をたくましくすれば、それは、鳥の飛んでゆく空のかなたこそ、祖霊あるいは死後の世界があるという、「他界観念」にもとづくものであろう』（註97）と想定している。

千葉県市川市姥山貝塚M地点（註74）で発掘された加曽利BI期のものと思われる髪飾も、あるいは鳥嘴形角器に含めるべきかもしれないが、人骨に伴って出土していない。同じ姥山貝塚B地点（註29）2号人骨の頭部左側には、上下を切断した叉状の鹿角製品が1本出土している。加工に乏しいが目的とするところ鳥嘴形角器と同じであったかもしれない。時期は加曽利E期と思われる。

胸部に鳥嘴形角器がおかれていた千鳥久保人骨と姥山B地点2号人骨を比較すると、両者とも熟年男性であること、頭位が西であること、埋葬姿勢が仰臥屈葬（姥山例は股開型）であることの点で共通しているのが注目される。仰臥屈葬であることは中期の主体的な埋葬姿勢であるから問題ない。頭位が西であることは中期の埋葬人骨の頭位が一定せず、鳥嘴形角器をもたずとも西頭位人骨

があるのでこれも重要な問題にはならない。残る熟年男性であるという点が埋葬に際し特殊な取り扱いを受けた理由であると思われる。その集落を代表する、選ばれた人物の葬送に際し、儀器を通して彼らの思想を表現したのであろう。しかし、鳥嘴形角器は極めて稀な存在である。

そこで問題とすべきは、逆位に埋置し、底部を穿孔もしくは欠損することを本来とする屋外の甕棺の存在である。『底部に穿たれた小孔は、この逆位に埋置することと結びついた所に本来的意味があると考えられる。すなわち、小孔は土器内に埋置された被葬者の霊的存在が意識されていたことを示すものであり、それを通じて地上界との交流およびそのコントロールが行なわれたのであろう。大塚和義氏は、鳥嘴形角器の問題から、関東北の縄文文化中期に、死後の世界を空のかなたとする他界観念のあったことを想定している。底部の小孔は、こうした死後の世界との往来に関連するものであったとも考えられる』（註73）

関東甲信豆地方における縄文時代中・後期の甕棺は、特殊な葬法であろうことは既に述べた。これは鳥嘴形角器が特殊な被葬者に結びつくことと共通した現象である。底部、稀に胴下部の穿孔や故意の欠損が共通に行なわれていることは、何らかの共通の意識の下にそれが行なわれたことを意味していると考えられる。その解釈は今引用した桜井清彦・原信之両氏の解釈が妥当であると思われる。そして他界観念の意識を直接的に示すと考えられる底部穿孔・欠損した甕棺に埋葬された胎・乳・幼児や、鳥嘴形角器を伴った熟年男性などは、選ばれた特殊な被葬者であり、生存者の意識が託された人たちであるといえよう。

人の頭を土器で被せた埋葬法は、小金井良精氏によって甕被葬（かめかぶりそう）と命名され、頭は全身中でもっとも大切なる部分だから特に大切に取り扱われたものであろうと解釈されている。と同時に、『石器時代に於ては小児を容れる位の甕はあったが、大人を容れる様な大きなものは作る事は出来なかったからして、大人にはこれを頭に被せる丈けで満足せねばならなかったのであらう』（註98）ともいっている。

成人の遺体がはいる土器は確かに縄文時代にはつくられなかった。それ故に土器を頭に被せるだけで満足したというなら、甕被葬の数が多くなるに違いない。しかし、実際には甕被葬は極めて稀な葬法であった。甕被葬は成人の甕棺葬の代用法と考えることはできない。また埼玉県入間市坂東山遺跡（註26）例のように、稀にではあるが甕棺中に成人骨を再葬したものがある。そのような例が多い場合、再葬の風習を考慮すべきだが、今までに得られている史料による限りでは、縄文時代一般には偶然掘り起こしてしまった人骨をたまたま甕棺として再葬したという偶発性を考慮すべきである。甕棺を使用しないで1個所に人骨が集積されている例や、規則的に並べた盤状集積などと同様な処理の1方法と考えられる。

甕被葬が検出されている遺跡をあげると

大阪府藤井寺市国府遺跡（註99）	前
長野県小県郡東部町大川遺跡（註100）	中1
千葉県野田市三味寺貝塚（註101）	中1
千葉県松戸市上本郷貝塚（註102）	中1
千葉県松戸市中峠貝塚（註103）	中1
千葉県市川市姥山貝塚（註74）	中1
千葉県市川市今島田貝塚（註74・104）	中1
千葉県千葉市加曽利貝塚（註105）	中2
千葉県千葉市蕨立貝塚（註106）	中2
千葉県千葉市長谷部貝塚（註107）	中？1
千葉県千葉市さら坊貝塚（註108）	中1
千葉県松戸市貝の花貝塚（註63）	後1
茨城県稲敷郡桜川村広畑貝塚（109）	後1
岡山県笠岡市津雲貝塚（註110）	後1
愛知県宝飯郡小坂井町稲荷山貝塚（註110）	晩1

となり、中期後半加曽利E期の東京湾沿岸下総台地上の貝塚に多いことがわかる。勿論人骨が消失してしまったが甕被葬を想定してもよい例が内陸部にもある。それも中期後半に多いようである。

このように甕被葬は、極めて稀な特殊な埋葬法であった。このことは単に頭は全身中でもっとも大切なる部分だから特に大切に取り扱われたのであるという生半可な解釈を不可能とする。

坂詰秀一氏は、『甕被葬の意義を宗教的観念と有機的関係ありと考えている。即ち、未開社会にあって、死者の頭部に容器を被せ、それによって死亡原因の悪霊逃散を防止せんとする願望あるが知られているからである。故に、甕被葬の意義は、やはり、特殊なる被葬者、即ち、変死せる者――死亡原因の不可解なるもの――に対する素朴なる恐怖観念を示していると云えるのではあるまいか

』（註85）と考えている。甕被葬に用いた土器には、中期甕棺の多くにみられる意識的な穿孔や欠損の事実が指摘されていないから、甕被葬と甕棺葬は異質な関係にあったと考えられる。すなわち逆位の底部穿孔・欠損をみる甕棺葬は、外界との交流・往来ができるように意識されているのに対し、甕被葬は、外界との交流・往来ができないように封じ込めるように意識されていたと考えられるのである。

また遺体上部を土器の大破片で被せた抱甕葬も甕被葬の発想法と共通するものと考えられる。千葉県では、千葉市さら坊貝塚（註108）、松戸市殿平賀貝塚（註111）で各1例発掘されている。前者は加曽利EⅡ期、後者は堀之内Ⅰ期である。松戸市貝の花貝塚（註63）第21号人骨は、堀之内Ⅰ式土器の大破片で頭部を被せており一応甕被葬に含めたが抱甕葬にも共通するものである。

この甕被葬と抱甕葬という封じ込む埋葬法は、地域的には千葉県の東京湾沿岸下総台地、時期的には中期後半の加曽利E期に集中して存在していることは注目しなければならない。そしてそのような葬法をとる人骨は、1集落に1～2例程度にとどまっているようである。これらのことから、他界観念が強く意識されている集落において、坂詰秀一氏が指摘するような変死せる者がでた場合、その者に限って死霊が他界の地に行かないように土器で封じ込めたと解釈される。そこで問題になるのは、変死せる者 ― 死亡原因の不可解な者が果して容易に判定できたか否かである。これは昔も難かしい事柄であったろうし、このことは我々にとって更に不可知なものである。今は死霊を封じ込める必要性を認めた結果であるとしておこう。

とに角『他界観のもとで、死者の頭に甕をかぶせてその死霊を封じこめる甕被葬あるいは甕棺葬という行為がなされたのかもしれない』（註112）と、甕被葬と甕棺葬を同一のものとして理解することはできない。他界観念のもとでこそ他界の地に行くことが好ましからざる死霊を封じ込める必要性が殊更あるわけである。

従って、甕被葬、抱甕葬、底部穿孔・欠損の逆位の甕棺葬の存在は、その集落における他界観念の存在を証しているものと一般的には理解される。先に墓地が墓地として独立的に存在し、墓地に人間の遺体以外の生命を失ったものの積極的廃・遺棄が認められない場合を膳棚型と名づけたが、この内陸部諸集落に一般的に認められるであろう膳棚型にあっては、他界するものは人間 ― 死者に限定されていたと考えられる。

一方加曽利型の世界観を共有していると考えられる東京湾沿岸下総台地の貝塚地帯諸集落では、人間の死体、道具類、食料残滓などを廃屋を中心に埋葬、廃棄、遺棄し、あらゆる「生なきもの」の存在する場所が一致し、時間的経過とともにその平面形が円形になることが多い。そこはあらゆる「生なきもの」の永遠の終息地ではあっても、いわば形骸、ぬけがらの存在する場所であり、そこから空間的に投影された死後の世界＝他界 ― 幻想の楽園 ― が想念されていたものと思われる。この他界の地は一方向に固定したものではなく、不定であったらしい。というのは、加曽利E期の埋葬された人骨の頭位方向が極めて不規則だからである。

(6) 小括

勝坂期の項で触れたように、原加曽利E期には勝坂式土器からの直接的系譜をひく円筒形深鉢形土器があり、おそらく蛇身装飾が抽象化・退化した文様や手モチーフが時々みられる。これらは原加曽利E式土器分布圏の縁辺、勝坂式土器分布圏に接する集落に多く認められる。つまり勝坂系の文化要素の影響を受けやすい地域や色濃い段階においては、一部に勝坂系の文化要素がみられる。しかし、それらがどの程度意味をもっていたかということになれば、おそらく形骸化したヘビのぬけがら程度でしかなかったろう。加曽利EⅠ式土器では完全に捨て去られている。

東京湾沿岸下総台地に目白押しに並んでいる中・後期の馬蹄形貝塚の形成始期を大別すると、阿玉台期から継続する例と、堀之内Ⅰ期以降に盛行する例（この中には住居址は確認されていないが、加曽利EⅡ式やⅢ式土器が検出されている例がある）に2分される。つまり加曽利E期の生活は、阿玉台期の生活を引き継いでいることになるわけであるが、種々の点で大きな差がある。貧相な石器所有から打製石斧をはじめとする大量の石器所有へ、貧弱な竪穴式住居から深く・大きく・主柱を何本ももった円系統の立派な竪穴式住居へ、漁撈活動も一層活発化するが、なかでも阿玉台期の

不明の埋葬法から加曽利E期の廃屋墓の形式をとることが多い仰臥屈葬を主とする埋葬法へという埋葬法の変化・変質が著しく目立つのである。

この経済生活や精神生活をはじめとする生活諸般の変化・変質は、下総台地に住む阿玉台式土器使用者たちがひとり孤立して成した自己展開によるものではなく、むしろ外部的な強い影響によるものと考えられる。東京湾沿岸下総台地に強い影響を与えたのは、武蔵野台地や大宮台地に展開していた文化と判断される。それはいうまでもなく勝坂式土器から抜け出し、加曽利E式土器群の先駆的原型を形成した原加曽利E式土器を共有する人々のもつ文化である。その間には、婚姻を媒介とした多くの人的移動を想定すべきである。

東京湾沿岸下総台地の加曽利E期に特徴的な世界観は、武蔵野台地の東南端に位置する東京都大田区千鳥久保貝塚（註113）における勝坂期の熟年男性仰臥屈葬人骨の胸部に置かれた鳥嘴形角器から想定された他界観に直接的系譜を認めることができる。すなわち、馬蹄形貝塚の東京湾ベルト地帯において典型的に発達した加曽利E期の世界観は、武蔵野台地に住む一部の勝坂式土器使用者たちの精神的行動様式の中から生成したものであることが予想されるのである。そして武蔵野台地における脱勝坂化 ― 加曽利E化は、呪術宗教的要素の逓減・消滅（ただ1つの例外は、埋甕の採用である）、勝坂式土器から原加曽利E式土器を経て加曽利EⅠ式土器へと型式変化を成し遂げていることから観察される。

従って、勝坂期のアニミズム呪術から、ないしは阿玉台期の不明瞭な世界観から、加曽利E期の他界観へと世界観が大きく変化したことになる。他界観のもとで人々の願望は、時間的未来に投影されることなく空間的に投影されている。しかもその空間は1個所に固定したものではなく、また実体として存在しているものでもなかった。まさに非現実的な想念の所産である。

沿岸部貝塚地帯には、呪術に用いる道具や呪術を施行する特定の祭場もなかった。そこには、現実生活を積極的に生き抜こうとする行動が、脱日常的呪術宗教的イデオロギーという思想的裏付けをもってとられていたのである。一方内陸部においては、埋甕以外みるべきものがなかったが、やがて加曽利EⅡ期以降徐々に呪術化の傾向を深めていく。それは勝坂式土器とその分布域などを直接後継する曽利式土器を共有する社会と密接に関係するのである。

〔脚註〕

(1) 河野実「J地点」『鶴川遺跡群』1972

(2) 渡辺忠胤「八王子市小比企町向原複合住居址発掘調査報告」多摩考古第1号 1960

(3) 岩井住男ほか「膳棚」鳳翔7号 1970

(4) 吉田格「都下北多摩郡国分寺町恋ケ窪発見の土偶」考古学ノート創刊号 1951

吉田格「東京都国分寺町恋ケ窪竪穴住居趾の土器に就て」銅鐸第12号 1956

(5) 桜井清彦・和田哲「練馬区貫井町三菱レイヨン遺跡 ― 縄文中期の竪穴住居址 ― 」古代第29・30号 1958

(6) 湯浅喜代治・江森正義「千葉県中峠遺跡発見の女性土偶について」考古学雑誌第55巻第2号 1969

(7) 城近憲一ほか「宮地遺跡」狭山市文化財調査報告Ⅰ 1972

(8) 小出義治「失われた原始集落 ― 都下鶴川遺跡の場合 ― 」科学読売第17巻第4号 1965

(9) 江坂輝弥『土偶』1960

(10) 蘭田芳雄「桐生市菱町郷土史考古編」両毛考古学会 1970

(11) 蘭田芳雄「群馬県桐生市大門遺跡」日本考古学年報14 1966

(12) 桐原健「縄文中期に見られる埋甕の性格について」古代文化第18巻第3号 1967

(13) 宮坂光昭・戸沢充則ほか「海戸 第2次調査報告書」長野県考古学会研究報告書4 1968

(14) 神村透「南信地方の埋甕について ― その学史と事例 ― 」長野県考古学会誌第15号 1973

(15) 神沢勇一「左藤内遺跡」神奈川県立博物館発掘調査報告書第5号 1971

(16) 神沢勇一「梶山遺跡(3)」神奈川県立博物館発掘調査報告書第4号 1970

(17) 佐藤安平ほか「横浜市旭区宮沢遺跡調査報告」昭和44年度横浜市埋蔵文化財調査報告書 1970

(18) 朝光寺原遺跡調査団「朝光寺原A地区遺跡第1次発掘調査略報「昭和42年度横浜市域北部埋蔵文化財調査報告書 1968

(19) 渡辺誠「川崎市初山遺跡第3次調査概報」

１９７１
⑳ 樋口清之・川崎義雄・小田静夫「神奈川県川崎市野川西耕地遺跡発掘報告」上代文化第３７輯　１９６７
樋口清之・麻生優「西耕地遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告２　１９７１
㉑ 渡辺忠胤「八王子市中原遺跡調査報公」多摩考古第５号　１９６３
㉒ 玉口時雄「東京都八王子市狭間遺跡」日本考古学年報１６　１９６８
㉓ 宮塚義人・楫田光明「東京都八王子市宮田遺跡の調査（1）」多摩考古第１２号　１９７２
㉔ 肥留間博・横山悦枝ほか「中山谷」小金井市文化財調査報告書１　１９７２
㉕ 桜井清彦・杉山荘平・栗原文蔵ほか「大蔵遺跡」新修世田谷区史付編　１９６２
㉖ 谷井彪・宮崎朝雄・並木隆ほか「坂東山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第２集　１９７３
㉗ 下村克彦・吉川国男ほか「高井遺跡」桶川町文化財調査報告Ⅲ　１９６９
㉘ 宮崎朝雄ほか「西原遺跡発掘調査報告」東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　１９７２
㉙ 宮坂光次・八幡一郎「下総姥山貝塚発掘調査予報」人類学雑誌第４２巻第１号　１９２７
八幡一郎・松村瞭・小金井良精「下総姥山ニ於ケル石器時代遺跡」東京帝国大学理学部人類学教室研究報告第５編　１９３２
㉚ 寺村光晴「蟹ヶ沢遺跡」神奈川県座間町文化財調査報告第２　１９６６
㉛ 藤塚明ほか「そとごう遺跡調査概報」そとごう遺跡調査会　１９７１
㉜ 和島誠一ほか「三殿台」１９６８
㉝ 釜口幸一・井上義弘・佐藤安平「横浜市旭区宮沢遺跡第２次調査報告」昭和４５年度横浜市埋蔵文化財調査報告書　１９７１
㉞ 釜口幸一・大貫周一ほか「新羽・大熊地区土地改良区埋蔵文化財調査報告」昭和４５年度横浜市埋蔵文化財調査報告書　１９７１
㉟ 久保常晴・伊東秀吉・関俊彦「潮見台遺跡」１９７１
㊱ 関俊彦・大三輪竜彦ほか「東神庭遺跡第１次調査概要」１９７３
㊲ 浅川利一・戸田哲也「町田市玉川学園清水台遺跡緊急発掘調査略報」文化財の保護第３号　１９７１
㊳ 岡田淳子・阿久津久ほか「八王子中田遺跡資料篇Ⅲ」１９６８
㊴ 佐々木蔵之助・渡辺忠胤ほか「宇津木遺跡とその周辺―方形周溝墓初発見の遺跡―」1973
㊵ 吉田格「東京都玉川野毛町公園内縄文式竪穴住居址発掘概報」武蔵野第３５巻第１号1956
㊶ 青木一美「西田町谷戸遺跡第二次調査」西郊文化第９輯　1954　これは加曽利ＥⅢ式土器に含めるべきかもしれない。
㊷ 駒場学園高等学校歴史研究部・東京都立三鷹高等学校考古学部「深大寺東原遺跡」１９６８
石川和明「調布市深大寺町東原遺跡調査報告」多摩考古第９号　1968
㊸ 寺村光晴・一山典ほか「小山台遺跡 ― 東京都東久留米市小山台遺跡調査の記録 ― 」東久留米市立久留米中学校　1971
㊹ 肥留間博「狭山遺跡Ａ地点」東京都瑞穂町文化財調査報告１　１９７０
㊺ 栗原文蔵・今村泰之・野部徳秋「岩の上遺跡の発掘調査」埼玉県遺跡発掘調査報告書第１集　１９７３
㊻ 滝口宏・平野元三郎「船橋市前貝塚町塚田貝塚」千葉県遺跡調査報告書　1964　大木９式の系統をひくという。一応ここに含めた。
㊼ 平野元三郎・内野美三夫・柿沼広・対馬郁夫・野中徹「祇園貝塚発掘調査概報」千葉県文化財調査抄報第４集　1970
㊽ 吉田格・岡田淳子「武蔵野市御殿山遺跡調査報告　後編 ― １９６３年の調査 ― 」『武蔵野市史資料編』1965
㊾ 矢島清作・村主誠二郎「東京市上石神井扇山の平地住居遺跡１考古学雑誌第３０巻第２号、1940
㊿ 金井塚良一「前山遺跡 ― 発掘調査の概報―」東松山市文化財調査報告書第２集　1963
51 藤井功・前田潮「松山市栗ヶ沢遺跡調査報告」史潮第９４号　1966
52 尾崎喜左雄・相沢貞順・中村富夫ほか「小室遺跡」群馬県勢多郡北橘村文化財調査報告1968
53 桜井清彦「神奈川県横浜市猿田遺跡」日本考古学年報２０・1972
54 立正大学考古学研究会「破壊されてゆく遺跡

金森遺跡を中心として（縄文時代中期）」1966
(55) 吉田格「東京都小金井市貫井遺跡」日本考古学年報１８　1970
(56) 宮野和明「嵯峨山遺跡」第４回遺跡発掘調査報告会発表要旨　1971
(57) 貞末堯司「埼玉県入間郡越生町字上野上台山遺跡発掘概報」第２回遺跡発掘調査報告会発表要旨　1969
(58) 城近憲一「伊奈町志久遺跡」第５回遺跡発掘調査報告会発表要旨　1972
(59) 尾崎喜左雄「群馬県利根郡乾田住居跡」日本考古学年報１２　1964
(60) 小沢国平「埼玉県深谷市小台遺跡」日本考古学年報１０　1963
(61) 寺村光晴「武蔵野市御殿山遺跡調査報告　前編 ― １９６２年の調査 ― 」『武蔵野市史資料編』　1965
(62) 岩崎卓也「陣ヶ前貝塚」松戸市文化財調査報告第１集　1963
(63) 八幡一郎・岩崎卓也・関根孝夫ほか「貝の花貝塚」松戸市文化財調査報告第４集　1973
(64) 米内邦雄・宮入和博「千代田遺跡」１９７２
(65) 戸沢充則「利島大石山遺跡の第二次調査」東京都文化財調査報告書７・伊豆諸島文化財総合調査報告第２分冊　1959
(66) 柴田常恵「新に発見したる多摩陵附近石器時代住居址」史蹟名勝天然記念物第２集第６号　1927
　後藤守一「船田向石器時代住居遺址」東京府史蹟保存物調査報告書第１０冊　1933
(67) 後藤守一「武蔵国羽ヶ田の敷石住居址」考古学雑誌第２７巻第７号　1937
　後藤守一「羽ヶ田遺蹟」東京府史　名勝天然紀念物調査報告書第１４冊　1938　第１号敷石の張出部先端に埋甕をみるが、土器の具体的記述・実測・写真が欠如しており詳細不明。
(68) 上川名昭「甲斐北原・柳田遺跡の研究 ― 中期縄文文化期に於ける特殊遺構 ― 」１９７１
(69) 谷口一夫「山梨県大菩薩嶺西麓出土の中期縄文土器」信濃第２１巻第４号　1969
　上川名昭　註 (68) 文献
　上野晴朗「山梨県塩山市中萩原重郎原遺跡」山梨郷土研究会考古部会　1972
(70) 武藤雄六「藤内特殊遺構」『井戸尻』１９６５
(71) 埼玉大学考古学研究会「舟山遺跡展」鳳翔２号　1966
(72) 山内清男・甲野勇・江坂輝弥『日本原始美術１』１９６４　図版１１２及び解説
(73) 桜井清彦・原信之「神奈川県伊勢原町横手原出土の底部穿孔土器について」考古学雑誌第５４巻第２号　1968
(74) 杉原荘介・戸沢充則「貝塚文化 ― 縄文時代 ― 」『市川市史』第１巻　1971
(75) 平野元三郎・滝口宏「下総高木村寒風発見の人骨」ドルメン第２巻第７号　1933
(76) 吉田義昭「甕棺と思われる縄文文化中期の土器群」石器時代第３号　1956
(77) 小片保・森本岩太郎・江坂輝弥「青森県表館発見の縄文文化後期初頭の甕棺と人骨」考古学ジャーナル第６３号　1971
(78) 江坂輝弥「縄文土器文化後期における改葬甕棺墓の研究」北奥古代文化創刊号　1968
(79) 吉田格・肥留間博「横浜市称名寺Ｄ貝塚調査概報」武蔵野第４７巻第２・３号　1968
　小片保「称名寺貝塚人骨所見概報（武蔵野郷土館所蔵）」武蔵野第４７巻第２・３号　1968
(80) 水野祐「姥山貝塚発掘調査略報」史観第１７冊　1938
(81) 高橋良治・塚田光・小片保「千葉県子和清水貝塚調査概報」考古学雑誌第４９巻第２号　1963
(82) 西野元・岡崎文喜・小片保ほか「高根木戸」船橋市教育委員会　1971
(83) 昭和４１年発掘調査
(84) 大場磐雄『日本考古学新講』１９４８
(85) 坂詰秀一「日本石器時代　墓の類型的研究」日本考古学研究　1961
(86) 谷井彪「内畑遺跡発掘調査報告」埼玉県遺跡調査会報告第７集　1970
(87) 青木義脩「三室・馬場遺跡の発掘調査」うらわ文化第２７号　1969
　青木義脩「馬場遺跡第二次調査報向」浦和市教育委員会　1871
(88) 早川智明・梅沢太久夫「椚谷遺跡発掘調査報告」埼玉考古第８号　1970
(89) 柳田敏司・宮内正勝・青木義脩「明花遺跡」浦和市教育委員会　1968
(90) 梅沢太久夫「縄文時代の葬制について(1)―

土坑の性格と意義についての試論 一 」台地研究第１９号　1971
(91) 清野謙次『日本原人の研究』1925
(92) 清野謙次『日本民族生成論』1946
清野謙次『日本歴史のあけぼの』1947
清野謙次『人類の起源』1950
(93) 西村正衛「縄文時代の生活と社会　埋葬」日本の考古学Ⅱ　縄文時代　1965
(94) 戸田哲也「縄文時代における宗教意識について」下総考古学４　1971
(95) 武田宗久「原始社会」『千葉市誌』1953
(96) 西村正衛「市川市国分旧東練兵場貝塚」学術研究第１０号　1963
(97) 大塚和義「縄文時代の葬制 一 埋葬形態による分析一」史苑第２７巻第３号　1967
(98) 小金井良精「日本石器時代の埋葬状態」人類学雑誌第３８巻第１号　1923
(99) 浜田耕作「河内国府石器時代遺跡発掘報告」京都大学考古学研究報告第２冊　1918
(100) 鈴木誠「長野県大川発見の甕被葬の一例」人類学雑誌第６５巻第２号　1956
(101) 昭和３４年７月　樋口清之・下津谷達男氏発掘　文献(85)による。
(102) 多川幸一・村上俊嗣・吉田靖雄「千葉県松戸市上本郷貝塚の調査」史潮第７５号　1965
(103) 高橋良治「阿玉台式土器の研究の現状と問題点」考古学手帳２５　1965
(104) 熊野正也「今島田遺跡」市川市文化財調査報告第１集　1969
(105) 昭和４３年８・９月　加曽利貝塚調査団発掘
(106) 武田宗久「千葉県千葉市蕨立貝塚」日本考古学年報４　1955
(107) 昭和３４年１２月　早稲田大学（滝口宏氏）発掘　『千葉県文化財総覧』千葉県教育委員会　1969第１版に写真掲載。
(108) 昭和４１年発掘調査　千葉市立加曽利貝塚博物館に展示されている。甕被葬でもある。
(109) 吉田格「茨城県広畑貝塚」『関東の石器時代』1973
(110) 清野謙次『日本民族生成論』1946
(111) 村上俊嗣「松戸市殿平賀貝塚調査報告」考古学雑誌第５２巻第４号　1967
(112) 大塚和義「縄文時代の埋葬」歴史教育第１６巻第４号　1968
(113) 菊地義次「千鳥久保貝塚発見の骨角器を着装せる人骨に就て」古代第２５・２６号　1957